

無力さが変えてくれたもの

私には小学校からの大切な友達がいる。それは一歳年下のAちゃんだ。Aちゃんは21トリソミー、ダウン症候群で同じ小学校に通っていたものの、ほとんどの授業は支援学級で受けていた。Aちゃんはとても人懐っこく、食べるのが大好きで、手伝いである「洗濯物畳み」はAちゃんの得意分野だった。まれに家族や友達を強く叩くことがある。これは自分の気持ちを言葉で伝えるのが難しいAちゃんにとって最大の愛情表現だった。そんな幼い頃から一緒にいるAちゃんは私にとって生きていることが当たり前で、Aちゃんのできないことを手伝ったり、教えたりするのも当たり前のことだった。そんな当たり前のことが当たり前じゃないのかもしれない、そう思った瞬間があった。それはAちゃんの着替えを手伝っていた時のことだった。胸部の辺りから腹部にかけて縦に10 cmほどの大きな傷があることを知った。その時、私は着替えを手伝っている手が止まってしまった。そして私は幼いながらにその傷が手術の跡である事を理解した。手術とはどれほど怖く不安なものなのだろう。病室はどれほど寂しいものなのだろう。私には想像も出来ず、言葉が出なかった。もし、今Aちゃんが手術する前段階だったとしたらどんな支えになれるのだろうかとその日私は1日中考えた。しかし、何も答えは出ず、自分自身の無力さを感じた。

私は今まで生きていることが当たり前で生きるための選択肢を選んだことも考えたこともなかった。しかしAちゃんは違う。生きるために「手術」という選択肢を選び、それを乗り越え今を生きている。今までAちゃんに教えることが多かった私は、その時Aちゃんに生きること、生きていることが当たり前なことではなく、奇跡的な事であり、恵まれた事なのだ気付かされた。この気付きから私は、生きていることが当たり前ではない人たちの支えになりたいと強く思うようになった。これが私が看護師を目指すようになった大きなきっかけであった。

看護学生となった今、私には夢がある。それは手術室看護師、オペナースになる事だ。私はAちゃんの傷を見たその日から今まで、あの日感じた無力さを忘れたことはなかった。手術は一般的に家族が手術室に入ることは出来ず、患者さんは孤独であり、恐怖や不安を必ず感じるものだと思う。Aちゃんも同じだっただろう。そんな時に1番近くで寄り添うことができるのは看護師であり、特に手術室に入ることのできる手術室看護師だと私は思う。手術の事など想像も出来ず、無力さを感じたからこそ、私は患者さんが安心して手術を受けることのできる環境をつくりたい、手術を受けると決断した患者さんの支えになりたいと心の底から思うのである。あの日感じた無力さは手術室看護師になりたいという夢に変わった。そのきっかけをくれたのもAちゃんだった。だからこそ私は必ず夢を叶えたい。